一般社団法人
日本人間関係学会ニュース 第106号 発行日：2024.2.15
News No.106 Japan Association of Human Relations February 15,2024

発　行：日本人間関係学会 広報委員会　E-mail: tanikawa@kusw.ac.jp 関西福祉大学 谷川和昭研究室
事務局：〒799-2496 愛媛県松山市北条660 聖カタリナ大学人間健康福祉学部 釜野研究室
E-mail：jahrjimukyoku@gmail.com　URL：https://jahr.jp/

［内容］☆巻頭言　☆全国大会メモリー　☆北から、南から　☆順子の映画鑑賞記⑩　☆記念出版原稿追加募集　☆事務局だより

《巻頭言》

日本人間関係学会第31回全国大会の開催報告

大会長　田中 康雄
（西南学院大学教授）

日本人間関係学会 第 31 回全国大会は、福岡市にございます西南学院大学にて、2023年9月9日（土）に、大会テーマ「With コロナ時代における対面コミュニケーションの重要性と人間関係の構築に向けて」とし、盛会裏に開催を終えることができました。

無事に当日を迎えることができたのは、大会実行委員の先生方、当日ご参加いただいた学会員の皆さま、前日の午前から会場設営をご準備いただいた仲田勝美先生・黒木真吾先生・竹下徹先生・牛島豊広先生、大会に協賛いただいた5社・団体・法人様、そして西南学院大学の田中康雄ゼミ生のご協力があったからこそと、心から感じております。

当日のプログラムでは、鈴木満先生に総合司会を担っていただいたおかげで、円滑に各プログラムを進行することができました。シンポジウムでは、「地域共生社会における人間関係のあり方」について、早坂三郎先生・丸谷充子先生・山中康平先生・釜野鉄平先生で、各研究・実践をエビデンスに提言いただきました。次に、特別企画として、竹下徹先生・牛島豊広先生で、「地域共生社会に向けた福岡市早良区西新の地域実践」を講演いただき、その後は会員交流を兼ねて、地域散策と昼食を取りながら、7名の田中康雄ゼミ生も加わり、実施いたしました。

午後は、口頭研究・実践発表を各分科会に分かれ、様々な分野の研究や実践を踏まえた発表がなされ、その中から竹中泰央会員の「学習の持つ遊びとしての性格」、叶寧会員の「A県B市の地域包括支援センターと保健補導員との関わりおよび保健補導員に期待される役割に関する研究」の2演題について、奨励賞が選出されました。

さらに、前日には、佐々木かなこ先生を中心に、語り旅部会企画（エクスカーション）の博多・福岡編を開催され、全国大会に花を添えていただきました。

その後、総会では、事業報告と事業計画等の説明、そして日本人間関係学会のロゴマークとして、三好明夫先生のデザインが採択されました。

第32回全国大会の開催については、加藤誠之次回大会長から、四国の高知大学にて、開催する旨のご案内がございました。

以上が、大会報告内容となっております。

最後に、第31回全国大会に関わっていただいた全ての方々に、あらためて、心から感謝の意をお伝えさせていただきたいと思います。

本当にありがとうございました。

会場の「西南学院百年館」

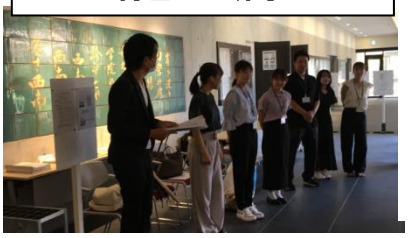
大会挨拶

シンポジウム

特別企画

口頭研究・実践発表分科会

打合せの様子



JAHiR
日本人間関係学会
Japan Association of Human Relations

全国大会メモリー

参加受付

記念撮影

シンポジウム報告

テーマ「地域共生社会における人間関係のあり方」

釜野鉄平（聖カタリナ大学）

現在のわが国では、地域社会における人間関係の希薄化による支え合い基盤の弱体化が進んでおり、従来は地域社会内の互助によって機能していた日常の支え合いや、地域行事、見守りや防犯などの力の低下につながっています。このような現状の改善に向けて厚生労働省では、地域共生社会の実現に向けた取り組みを進めていいます。

地域共生社会とは第31回全国大会のプログラム・発表要旨集（13頁）にあるように、「制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」です。これを実現するためには、性別や世代などを超えた多様な人と人とのつながりを欠かすことができません。

本シンポジウムでは、人がつながり支え合う仕組みづくりの実現に向けた、人間関係の構築のあり方について、３つの視点から模索を行いました。

最初に本学会理事長でもある甲子園短期大学の早坂三郎教授より、「若年層に関する教育学研究者の視点」から発言をしていただきました。現在の若者は印刷技術や通信技術等の発達により、対人関係の機会の減少、自分の居場所となる環境を持てない、悩みを相談できる相手のいない人が増えており、そのことが不登校や自己肯定感の低下にもつながっていると指摘されました。様ざまな人や環境との関係から自己の認識が芽生え、自己があるからこそ利他的な行動ができることから、ICTなどの新しいツールのプラス面を新しい人間関係の構築や自己の形成に生かしていく必要があると提言されました。

続いて、和洋女子大学の丸谷充子教授より、「子育て支援に関する心理学研究者の視点」から発言をいただきました。まず、地球温暖化による外遊びの減少やコロナ禍で子供にも求められたソーシャルディスタンス、少子化であるにもかかわらず児童虐待が増加しているなど子どもを取り巻く問題について指摘されました。子どもを取り巻く人間関係は大きく変容していますが、子育てに関する情報はネットに溢れていても膨大な情報から取捨選択できないことや、そもそも子育て世帯そのものが全世帯の2割程度であり少数であることから、地域社会において子どもと接する機会が極端に少ないことが問題をより複雑化させているということでした。そのような現状から、あらゆる世帯が子育てに関わりつながることのできる仕組みづくりの必要性について提言されました。

最後に、社会福祉法人新生福祉会の山中康平理事長より、「高齢者に関する社会福祉実践家としての視点」から発言いただきました。地域共生に関して高齢者介護の領域で見ると、島しょ部と都市部では利用者や職員の生活感・社会感が異なるため、画一的な方法は望めないこと。社会福祉法人が地域福祉の拠点となれるよう様ざまな取り組みが行われてきたが、コロナ禍により地域住民との関係が途切れたことや、増加する外国籍の介護職員と地域内外の人間関係構築の難しさについて指摘されました。これらの状況を受けて、地域での暮らしをより良くするために、地域住民と社会福祉法人との新しい関係作りや、支え合い機能構築の必要性について提言されました。

以上の３つの提言の後にフロアも巻き込んだ活発な意見交換が行われ、地域共生社会における人間関係の在り方を考えるポイントとして、「インターネットやICTの効果的活用」、「今ある支援事業・事例の共有」、「世代等を超えた多様な人と人とが関わる環境」の３つを共有することができました。

地域共生社会の実現には多様な社会問題に取り組むことが求められます。その取り組みは一領域での研究や実践だけで改善することは難しいため、多様な研究領域・実践現場の人材による共同を欠かすことはできません。その意味からも、多様な領域で活躍する会員が所属する日本人間関係学会の役割や意義についても再確認することができたシンポジウムとなりました。

学会ロゴマーク決定

募集しておりました日本人間関係学会のロゴマークについてご報告申し上げます。去る令和5年9月9日に西南学院大学にて田中康雄大会長のもと開催されました第31回全国大会の総会において、三好明夫会員から提出されましたロゴマークのデザインが賛成多数により、選ばれましたことを、以下のデザインと共にご報告いたします。

後日、三好会員には感謝状と副賞を贈らせていただきます。

これからは色々な機会に利用してまいりますので、ご要望がありましたら、事務局までお知らせください。

（理事長　早坂三郎）

〈Concept〉

頭文字JAHR の中の、H を向かい合う2 人として捉え、図案化しました。

人と人が手を取り合う様子は、学会の活動そのものであり、学会の目指す安心安全な社会を表しています。

その２人とは、大人と子ども、上下関係にある人など、自分とは違う人間です。

違う人間の間にこそ、新たな「人間関係」が生まれると考え、違う高さの人を配しました。

また頭文字４文字の中で１文字だけを人物化にすることで、込められた意図と見る人の視線をより強調したものとする狙いがあります。

文字の可読性を高めるため、また学会というアカデミックな場で使用することから、

直線的なフォントをベースにしていますが、取り合う手の部分は曲線でし、やわらかい雰囲気となるようにしました。

日本語表記「日本人間関係学会」のフォントについても、可読性が高いゴシック系のものを使用しています。

〈白黒反転〉

〈横長〉

〈極小〉

語り旅報告

「語り旅部会企画のエクスカーションを終えて」博多・福岡編

佐々木かなこ（語り旅部会）

2023年9月9日に、日本人間関係学会第31回全国大会が福岡県の西南学院大学で開催されました。それに合わせて、前日の9月８日に語り旅部会企画のエクスカーションを実施しました。

博多・福岡は、歴史・文化・伝統が息づく魅力ある街であり、是非その地域の方々と交流し、新たな知見を得たいと考えての企画にしました。

今回は、博多ふるさと館の館長である長谷川法世氏に、博多の特色、暮らしと人情について話していただきました。古来、博多は日本の表玄関としての営みがあり、商人の街として栄えてきました。長谷川氏の家業（旅館）の実例をあげながら、博多人の根底にある人情について語られました。商売は、損得を超えた人のつながりで築かれ、人情が要であることを力説されました。ご本人は漫画家として活躍されていて、代表作の『博多っ子純情』は人気作品で映画化もされています。

また、博多祇園山笠振興会事務局長の瀬戸浩隆氏には、782年続く祭りの仕組みや担い手としてのやりがい、後継者づくりの秘訣など、これまでの取り組みを説明していただきました。本番さながらのいで立ち（神輿を担ぐときの衣装）でお話しされ、ビデオを通しての説明には臨場感がありました。

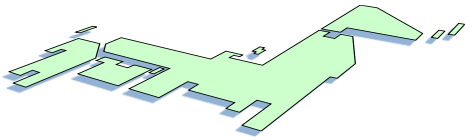
櫛田神社は、地域の総鎮守の位置にあり、神事が博多・福岡の伝統行事となって市民に支持されています。「博多祇園山笠」もその例であり、平成28年には世界遺産に登録されました。当日は、参加者からも多岐にわたる質問が出るなど、活発な交流ができました。その一例をあげると、「男性社会で営まれていることは、LGBTQ問題などにどのように対応しているのか」と、時代を反映した質問もありました。学芸員からは「神社の神の行事」規定がある説明をしながらも、今後は、人口減少などから、変容せざるを得ないのではないかと話されました。

交流会終了後、櫛田神社の境内を散策し、さらに市街に出て予定の名所を1時間ほど歩きました。博多・福岡の建築物、街並みには古来の斬新さが垣間見られ、それが今なお引き継がれていると実感しました。

本来、「語り旅」は様々な地域に赴き、その地の方々と交流して知見を広げること、会員の増員を図ることが主な目的でした。しかしながら、時代の変化とともに、学会のエクスカーションとしての機能を果たして行くことが求まられています。その地域の歴史、文化など専門家の解説を聞きながら、現地での体験や議論を通して、理解を深めていくものにしたいと考えます。

次回は、高知県を予定しており、現地の方々と検討中です。

（当日のスケジュール）
集合：博多町屋ふるさと館　（入場料200円各自払い）
13:30　1階　フロアーにて「博多祇園山笠」のビデオ上映　（15分間）
14:00　長谷川法世館長の講話（１３：５０地下会議室に集合）
15:00　瀬戸浩隆博多祇園山笠振興会事務局長の講話
16:00　散策→櫛田神社→川端商店街（アーケード）→福岡アジア美術館→アクロス福岡→水鏡神社→福岡市赤煉瓦文化館→那珂川清流公園中洲屋台散策　（18時頃解散）



伊勢への家族旅行

～コミュニケーションを楽しんだ旅～

和香絢子（WA-Smile 代表／講師）

先日、三重県伊勢市に家族で旅行へ行きました。

初日は伊勢神宮の外宮、内宮と参拝して旅の安全を祈願し、2日目に伊勢忍者キングダムというところに行ってみました。

この伊勢忍者キングダム、小学生の息子の強い希望により行ったのですが思った以上に楽しかったのでその時のことを綴りたいと思います。

伊勢神宮はコロナ禍明けということもあり多くの人で賑わっておりましたが、こちらは混雑もなくスムーズに入場。

入ってみるとまるでタイムスリップをして忍者の世界に入り込んだかのような村の景色に一気にテンションが上がります。

せっかくなので存分に忍者気分を味わおうと場内にある大浴場（温泉施設）のフロントにて忍者衣装をレンタルしました。

忍者の服装になり、身も心もすっかり忍者になったところでリアルRPGゲームの受付へ。

このリアルRPGというのが大変面白く、村中にいるスタッフ（村人）さんに話しかけて情報を入手し、ストーリーを進めていくというゲーム。

実際にボスと戦ったり、賭場でお金を調達したり、吹き矢や手裏剣投げなどのミッションも出ます。

コロナ禍ではあり得なかった、見ず知らずの方々に話しかけて情報を得るというシステム。

ボスを倒すのも、他のお客様に声を掛けて「一緒に協力しませんか？」と仲間を集めて勝負に挑みます。まさにコミュニケーション能力が必須のゲームでした。

スタッフ（村人）さんや他のお客様に自ら話しかけたり、時にはレベルを上げるために勝負を挑んだりと多くの方々とコミュニケーションを取るという経験は小学校生活をほとんどコロナ禍で過ごしている息子にはとても新鮮だったようで大興奮でした。

こんなことは非常に久しぶりでしたので、息子も夫も私も大変楽しい時間を過ごせました。

ただ、ボス戦が強かった・・・！他のお客様たちと何度もチャレンジしてみたものの、全く倒せず途中で断念して帰ってきたのが悔やまれます。ボス達は子供たちにも容赦なしです。

一切の忖度なしで毎回一瞬で打ちのめされました。

おかげさまで一緒に戦った方々とも強い仲間意識が生まれました。

またリベンジをしに必ず来ようと家族で誓ったあたりは忍者キングダムの思惑通りなのかもしれません。

夢中になって戦ったのでしょう。翌日は全身筋肉痛という悲劇も待ち受けていました。

それでも非常に楽しかったという思いが強く残っているのは、やはり人と人とふれあうことの楽しさは何にも勝るのだと思います。

奇異な世界の常識

児玉　渉（New International School of Japan　教員）

インターナショナルスクールというのは、日本人の私にとって非常に奇異な場所だ。そこで出会う教師、生徒、同じ日本人の教師、同じ日本人の生徒でさえも、日本の公立、私立の学校では感じられない特異さを有しているかのように思える。

私がインターナショナルスクールに務める中で、強く日本文化との差異を感じたのは、職員室がないこと、部活動がないこと、会議中にお菓子を食べながら、珈琲を飲みながら、テーブルに腰をかけて議論を進めること。管理職以下の教師間、同僚らとの間に上下関係がないこと。新人でもベテランと対等に意見交換を行うこと。クラスでピザパーティーを行い、ピザ代は学校から支出されること。運動会の前に練習がないこと。卒業式がダンスパーティーみたいなこと。大学でもないのに学校で卒業式を行う必要性がまるで理解できないイギリス人教師陣。（イギリスでは大学以前の学校の場合、学校行事としての卒業式はなく、生徒たちがホームパーティーなどで自主的に行うもの、とのこと）成績の低い、または授業についてこれない落ちこぼれ生徒を救おうという教師が日本人しかいないこと。教師の役割は学習指導であり生活指導が含まれていないこと。欧米の教員は自分の能力や実績を管理職にアピールして給料交渉を堂々と行うこと。ある中国人教員が、注意する生徒としない生徒について、親の権威を推し量って判断していたこと。挨拶はしなくてはいけないものではないこと。（※教師も挨拶しない人が多い。日本社会経験者は絶対に挨拶する）制服を着るか着ないかは家庭の責任であって学校の責任ではないこと。社会科といえば「地理、歴史、公民」ではなく「哲学や心理学」が中心に据えられていること。歴史の授業では、忠臣の義よりも革命家や自由活動家が高く評価されていること。声を出さない、前に出て行かない生徒は知識があっても評価が低いこと。勉強ができる、知識がある生徒よりも、自分の意見を持っている、議論に積極的に参加できる、知識を上手く説明できる、上手にアウトプットできる生徒の方が評価が高い。金八先生のような熱血教師が私しかいない。（上記のような冗談が平然とまかり通る）教師、生徒と共に自己主張が強い。謙虚であることが美徳と思われない。不良のタイプがスケートボードに乗ってスプレーで壁にラクガキするタイプであること。その不良たちが哲学や芸術、音楽、人権問題、差別問題に深く興味を持ち、大きく関心を向けていること。欧米の生徒、教師共にジェンダー平等や人権問題、人種差別問題にはとても厳しい正義の目を持っているにも関わらず、それ以外の、障がい者や貧困、老人介護などの福祉的問題にはまるで関心がないこと。日中韓台湾などアジア系の教諭、生徒たちは、さほど人権問題に騒いでいないこと。それよりも試験勉強に熱心で、知識量が多く、計算が得意という傾向が見られる。政治的、歴史認識問題の議論で衝突する事の多い日中韓台湾の教師、生徒たちが一致団結する価値観は「礼儀」であること。欧米の生徒、教師陣は「礼儀」に関してかなり無関心だが、その代わり「リスペクト」という価値観を強く持っている。これは日中韓台湾が掲げる「礼儀」と大きく違い、年上だから、先輩だから、目上の人だから、という条件を持たず、自分に対して、（または特定の人種に対して）敬意を表しているどうか、が問題となる。むしろ、日本の「礼儀」文化の押しつけは、欧米教師陣からは「リスペクト」していない、と受け止められ、衝突の原因となることが多い。英語圏の教師は、酒や煙草、大麻の禁止など、日本の法律について無関心であることが多い。さらに乱暴な解釈をすれば、日本語、日本文化、日本社会に対してのリスペクトはあまりされていない。それを表現するに最適な表現は「郷に入らば郷に従え」の感覚が皆無であることだ。日本に興味がないのに日本で働く教員がいること。毎日タクシーで登下校する生徒がいること。恋愛に関して教員、生徒共に非常にオープンであること。（※生徒の前で堂々と手をつないで歩く不倫カップルがいるくらい恋愛に関しての自由度が高い。彼らは芸能人の不倫で盛り上がるニュースに対して首を傾げている。政治家や皇室の人間でもないのに世論に叩か

れることが不思議だ、ということ）教室でお酒を飲んでパーティーする教員が複数名いること。教員が聖職ではないこと。海外の教員免許は通信講座などで簡単に取得しやすい仕組みであること。責任の外か内か、が重要であり、学校外で起きたことには、たとえ犯罪でも責任を持たない、というスタンス。また、たとえ生徒であっても教師への暴力や暴言など、社会的逸脱が見られる場合は容赦なく即時警察に通報すること。もしくは強制的に退学、転校させること。自分の授業についてこれない、または邪魔になると判断された生徒は、容赦なく他のクラスに則時移動させられること。教師が「生徒を守ることも大事だが自分自身を守ることも大事だ」と考えていること。そして教師といえど「権利や自由、信念は守られるべきだ」と考えていること。教師は生徒の悩みや訴えよりも「ストレスがないワークスタイル」を優先する。基本的に生徒の、人間関係トラブルなど日常の悩みはカウンセラー任せであること。その代わり、学習、進学についての相談、悩みに関しては日本の学校よりも手厚く指導しているように見える。責任を果たせない教員もまた、容赦なくクビにされるため、それなりに責任は果たされている。自己犠牲の助け合いはないこと。分かり易くいえば、公のために個を殺すようなことはないこと。（※助け合いがないわけではなく、あくまで自己犠牲という文化がない）政治の話も宗教の話もためらわず議論になること。731部隊や従軍慰安婦、南京虐殺事件に対して議論が行われること。（※トピックの選択については「ノーリミット」だそうです）性教育に関してもオープンであること。（必修ではないがコンドームのつけ方の指導などもクラスによってはあった）日韓問題ですら韓国人生徒らと真正面から議論できること。教師、生徒共に素直に生きていること。現代日本学生の価値基準の一つである「陽キャ・陰キャ」の価値観を持ち合わせていないこと。ルッキズムに対して批判的であるにも関わらず、自分たちの志向にそぐわない同級生には非常に冷たいこと。言語による分断があること。生徒たちが政治や環境問題、時事問題について熱心であること。活動家の真似をしている生徒が多いこと。東ヨーロッパや北欧など分類して地理を教えていたら、「ヨーロッパを勝手に分断するな」とポーランド人教師が怒ってきたこと。東洋思想と西洋思想について話をしていたら「東西で分断するな」と、先ほどと同じポーランド人教師が怒ってきたこと。反論したが、生徒たちはポーランド人教師の意見に耳を傾けていた。このポーランド人教師が始皇帝について名前すら知らず、全く知識がなかったこと。立場が違えば正義と悪は逆転する、という発想を持ち合せている教師が少ないこと。相手の立場になって考える教師が少ないこと。相手の立場になって考える教師が殆ど日本人であること。

ここまで多くの体験と偏見を書き連ねてきたが、ここからは、これらインターナショナルスクールでの経験を通して、これまで日本で経験した学校や社会を振り返り、日本の公教育、さらには日本社会について見えてきたこと、感じるようになったことを書く。

日本の公立中学校で教員をした経験や学生時代の体験を振り返って思うのは、日本の公教育には、礼儀に始まる従順さや規律が強調され、同質性や集団主義を重視する活動や文化が学校生活の殆どを占めていたのではないか、ということだ。これが学校内または日本社会の中で、他者の異質性を受け入れにくくし、不寛容な態度を生み出す原因になっていると考えられる。例えば、私が小学校三年生の頃、茶色いランドセルの男子がいじめを受けていた。いじめられていた子のランドセルが茶色だった、という話ではない。茶色のランドセルだからいじめられていたのだ。しかし当時の私もこれに対して「いじめられて当然」という感覚を抱いていたのだから恐ろしい。公教育の中で運動会や卒業式、合唱コンクール、文化祭等の行事や、委員会、学級、班など、日常の活動組織の中で、「一丸となる精神」が美徳とされ、教えられてきたことが、私たちの中で、無意識に「違い」を「悪い」ものとして捉え、異質性や個々の多様性に対して疑念や拒絶の精神を根付かせやすい環境を創り出していたのではないか、と推測できる。転校していった茶色のランドセルの同級生を思い出すと、今でも胸が痛む。彼は傷つけられるようなことはなにもしていなかった。

今ではインターナショナルスクールで働いているが、その前は岩手県から東京に上京して変化した価値観も多くある。千葉県では岩手県とも東京都とも違った価値観に直面した。両親の価値観から受けた

影響もある。「みんな違ってみんないい」が口癖の同僚職員から毎日故意に傷つけられるようないじめに遭ったこともある。どんな奇麗事にも例外は存在するのだと知った。人間の平等を説いていたリンカーン大統領も、黒人は人間と見なしていなかったわけで、正しい人や善人にも見えていない盲点は多く存在している。

また、公教育が得意な試験学習方式だが、これもまた正解を記憶する、または解き方を覚えることを重視する姿勢が、一つではない答えを気づきにくくしたり、他者の多様性を理解しにくくしている原因ではないか、と考えられる。「言われたことに疑問を持たず、黙って正確に動け」という指導者が教員にも多かったように思い出される。これらの、俗に昭和的といわれる指導の仕方は、軍国主義や工業国社会の中で生み出されていったもので、発想や批判的思考が求められる現代社会にはもはや弊害となっていると思える。社会人になると、成果よりも姿勢や努力が求められ、または美徳とされ、努力しない人への攻撃、差別、が一際激しくなる傾向にある。これも一つの「社会人とはこうあるべき」というモデルの押しつけであり、 解決のためには、もっと学校内や日本社会全体で、異なる意見や多様なライフスタイルへの理解を促進する必要があると考えられる。

最後に、英語圏について思うこと。

英語圏の人々にとって日本語など取るに足らない言語であることは容易に想像できるが、英語にはない表現や考え方が日本語にはあり、それを英語では言い表せないので、結果、本当の気持ちや考えが伝わらない。日本語の方がスマートな解決ができる場合があるにも関わらず、日本語に無関心または嫌悪している人たち、歩み寄ろうとしない人たちによってそれを妨害される。彼らは歴史を語るうえで、正しいものが勝者で、間違ったものは敗者だと教えている。日本が正しかったとは私も思わない。むしろ戦中の日本は日本国民にとっても悪質だったと考える。しかし、侵略という言葉は決して日本だけのことを差さない。何故なら、今でも英語による侵略は続いているからだ。英語の支配は既存の世界的な権力構造を写す鏡とはいえないだろうか。植民地の多さ、産業革命の中心地から続く言語的特権が、国際的な関係において不平等を助長し、英語を話さない国々やコミュニティが情報、資源、あらゆる機会において排除の対象となり得るように思える。国際的な場で、英語を話せる事以上に大切なことに気づく必要があるのではないか、というのが私の意見だ。

最後に。さきほどからインターナショナルスクールや日本社会の奇異な部分について述べてきたが、最も奇異なのは、まぎれもなく、英語も話せない上に外国の文化にも疎い私がインターナショナルスクールで働いていることである。

学会ニュースは年２回発行（２月・８月）

「北から、南から」のコーナーは会員であれば、どなたでも投稿できます。

お寄せいただきたいのは、**400～1,000 文字**程度です。多少オーバーしても大丈夫。

日々の生活で感じたことや、思い浮かんだこと、作品などお便りに載せてください。

１月末までの投稿分は２月発行のニュースに掲載されます

７月末までの投稿分は８月発行のニュースに掲載されます

送付先　広報委員会（谷川）まで　tanikawa@kusw.ac.jp

順子の映画鑑賞記

第１０回　総集編（語録集）

橋本順子

今回は総集編として、これまでの過去9回分の連載から語録集としてお届けいたします*。

連載第1回より
「家族の関係や恋愛に友情、人生のすべてを映画から学べる」と私の友人は言う。映画好きな私としても確かにそう実感している。

第2回より
私にとって映画を観ることは、疑問や矛盾を問い直し、見つめ直すためのものと言えるのかも知れません。私自身が社会を、現実を変えることができるとは思っておりませんが、知らなかったことを知るきっかけを与えてくれるのはいつも映画なのです。

第3回より
韓国映画は、朝鮮王朝の時代劇をはじめとして、南北分断、軍政、民主化などの背景を基に、様々な映画が製作されている。ジャンルの広さと、芸達者な俳優たちがいることは羨ましい。（中略）とにかく面白いので、食わず嫌いな人はぜひ挑戦を。

第4回より
偏見や差別がどうして起こるのかということでは、学会のテーマでも取り上げて欲しい根源的な問題だと思います。人種差別や民族差別は太古の時代から存在しているし、今もって日常的に直面する問題だと思えるからです。

第5回より
映画は所詮「作り物」ですが、知らない国の歴史や文化を理解することができ、その人の人生や価値観を知ることができます。だから私は映画を観続けたいと思っているのです。

第6回より
人間関係の基本は家族であると思う。夫婦間を基本として考えると、お互いの両親、祖父母、お互いの兄弟、姉妹。そして、自身の子供。それだけでも数十人の人間が存在する。いつの時代でも、夫婦、親子の喧嘩の理由は似たり寄ったりであろう。（人間関係学的には、家族、親族間の関係性の悪化には、どのようなアプローチをしていくべきであろうか。）

第7回より
この映画の根底にあるメッセージは、何年たっても年齢を経ても人間は成長できるということなのです。

第8回
表現方法の違いがあっても「戦争」を描くことによって、いわゆる「良い戦争」はありえない、その思いに至ることそれが映画の使命であると考えています。

前号・第9回より
火には、生産性的な側面と消失させるといった側面があります。恩恵と破壊と言えるのかも知れません。

＊学会ニュースの第97号から第105号の各回から抜き書きと文字の強調を行っております。

記念出版原稿追加募集のご案内

『わたしからあなたへ―北から、南から―』（仮）：30周年記念エッセイ・作品集

1. はじめに

本学会は、2023年11月14日に創立30周年を迎えております。この記念すべき節目を祝い、皆様のご参加によるエッセイ・作品集「わたしからあなたへ―北から、南から―」（仮）の刊行を企画いたしました。

2. コンセプト

本エッセイ・作品集は、学会ニュースの名物コーナー「北から、南から」をベースに、皆様からのエッセイや作品を掲載するものです。これまで掲載された作品のリライト、新規寄稿を募集し、会員の個性と多様性を表現する場を提供します。

3. 内容

- テーマ：自然、倫理、幸福、調査、地域、教育、家族、職場など
- 構成：提出いただいた原稿を「〇〇の章」にテーマ別に分類（変更の可能性あり）
- サイズ：A5判、並製
- ページ数：250ページ以内
- 内容：はしがき、本文（エッセイ・作品）、あとがきなど

4. 原稿募集

- 締め切り：2024年3月31日（日）
- 応募方法：Wordファイルまたはメール本文テキストにてご提出
  （タイトル・著者名・ご所属と肩書き・本文を含む）
  400～1,000字程度、それ以上は応相談。
  掲載希望の章があればその旨お知らせください。
- 提出先：編集委員代表　谷川和昭 tanikawa@kusw.ac.jp

5. その他

- 費用：学会経費および協賛金で賄う
- 印税・原稿料：なし
- 売上げ：学会財政へ還元

30周年記念出版は、皆様の貴重な経験や思いを共有し、未来へ繋ぐ架け橋となるものです。ご参加を心よりお待ちしております。

本企画にご賛同いただき、既に転載許可をいただく等、ご協力いただいている皆様に心より感謝申し上げます。

事務局だより

【会員動向】（2023年8月21日～2024年2月10日）
2024年2月10日現在
会員125名 （正会員：97名 一般会員：11名 準会員：17名　 賛助会員：０ ）
〈入会者〉　正会員：2名 ・金谷 裕香 ・矢野 善教
　　準会員：1名 ・屋嘉部 優花　　（敬称略）

福岡県での第31回全国大会から、早5ヶ月が経ち、2023年度も残り1カ月半です。
新年度には、ご所属やご住所が変更となる方がいらっしゃると思います。変更されました場合には、学会事務局までご連絡をお願いいたします。
来年度は高知県で第32回全国大会が開催されます。皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

日本人間関係学会第32回全国大会
予　告

テーマ　公共性の回復と人間関係の復活

会　期　2024年9月28日（土）～29日（日）

会　場　高知大学朝倉キャンパス

大会長　加藤誠之（学会理事、高知大学教育学部教授）

詳細は後日、学会公式ホームページ、会員一斉配信メールにてお知らしいたします。

（編集後記）
日本人間関係学会が設立されて30周年を迎えています（1993.11.14→2023.11.14）。そのような節目の時期に、今号をお送りできますこと感謝いたします。記事原稿にご協力いただきました関係諸氏、とりわけシンポジウム報告の釜野鉄平先生、語り旅部会報告の佐々木かなこ先生には特段のご配慮を賜りました。ご厚意に感謝申し上げます。30周年記念出版では原稿追加募集が行われております。皆様ご参加をお願いします。（谷川）